

高級陶磁器の代名詞ともなっているボーン・チャイナ。イギリスでは磁器の原料となるカオリンが出土しなかったため、陶磁器産業はドイツ・フランスなどから大きく遅れをとっていました。ボーン・チャイナを生み出した英国陶磁器は、どのように他の磁器と一線を画し、注目を浴びたのでしょうか。

ボーン・チャイナが生まれたのは、素焼きの陶器や土器などの焼き物の町として歴史があり、燃料となる石炭が豊富に産出された町、イギリス、スタッフォードシャーにあるストーク・オン・トレントです。この町にはクリーム・ウェアやカメオ風のジャスパー・ウェアを開発したウェッジウッドと並び、現在も創業しているイギリス最古窯、スポード窯があります。

貧困家庭に生まれたジョサイア・スポードⅠ（1733-97）は、父の死後6歳から窯業に従事し、銅版転写による下絵付け技法を使ったブルー・パターンを開発、製品化に成功し俄然注目を浴びました。また息子のジョサイア・スポードⅡ（1754-1827）は1797年、硬質磁器の材料、カオリンの代わりに牛の（特に雌牛の大腿骨）骨灰を全重量の50%も混ぜる研究を重ね、透光性に優れ堅固なボーン・チャイナの製品化に成功しました。この頃、中国からのポーセリン輸入には重税が課せられた上、軍事力強化のため商船貿易も減少。一方、ストーク・オン・トレントは産業革命の中心に近かったため、民間資本による技術や市場の開拓なども手伝い、ブルー・パターンとボーン・チャイナは英国を代表する陶磁器となったのです。

銅版転写とは原版の1センチ四方に1,000個もの点や線を彫り込み、釉薬（ゆうやく）という陶磁器表面を覆うガラス質の下に絵付けがされるため、生地の中に絵の具が染み込んでいるものです。熟練された職人でも仕上げには何ヶ月も要します。濃淡や陰影の遠近感で中国の楼閣山水図を描いたブルー・ウィロウや当時のローマ近郊の風景を題材にしたブルー・イタリアンなどのシリーズがあります。

ポーセリンが1400度で焼成するのに対し、ボーン・チャイナは1250度の低温で焼かれます。そのため鉛の入った柔らかい釉薬を使用するので、茶渋がつきやすい特徴があります。

1日に6杯は紅茶をいただくという英国文化。象牙色の軟らかな光りを放つボーン・チャイナに午後の紅茶を注いで、クリームたっぷりのスコーンをいただいてみませんか。

